



住民見学会

中丸地区自治会

見学日時:令和6年7月1日(月)7:30分~16時45分

見学施設:東日本大震災・原子力災害伝承館&フィールドワーク

施設住所:福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39

参加人数:中丸地区自治会長清水様、仲田センター長、鈴木副センター長他21名、計24名

移動手段:トキワ観光バス

8時に中丸コミセンを出発し、車中、仲田センター長の見学会開催の挨拶があり、つづいて清水中丸地区自治会長の挨拶をいただきました。1名が体調不良のため欠席となりました。

I 見学目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)から、13年が経過しました。

この大震災に伴う、地震による家屋などの損壊、また、地震による大津波が発生し多くの物が破壊流され、そして多くの方が大津波にのまれてしまいました。

さらに、大津波に伴い福島第一原子力発電所の第1号機から第3号機の原子炉がメルトダウンし、環境中に放射性物質が放出されました。

当時の記録など及び現状を見学し、複合災害の実態を、この目(脳)と耳で確認し、自分たちのこととし、災害は、また来るかも知れないという感覚をもって防災・減災にかかる対策などを進めていくための一助とする。

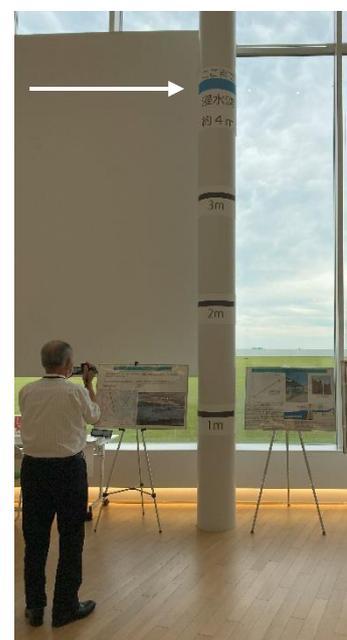
II 東日本大震災・原子力災害伝承館(福島県双葉町)見学

伝承館に入ると早速、館員の方が、津波の高さを示す展示物を説明してくれました。この場所で高さ**4m**の津波がきました。

施設の見学の前にプロローグシアター(半円球の大型スクリーン)で施設の基本理念である「災害の自分事化」や「福島の経験と教訓の未来への継承」にかかる映像が上映されました。(上映時間:5分)

その後2階への展示室へ移動中回廊の壁に町の生い立ち、原子力発電所の誘致や街の活性化についてパネルが展示されていました。2階の展示は、館員により次の項目について丁寧に説明していただきました。

- ① 災害の始まり
- ② 原子力発電所事故直後の対応
- ③ 県民の思い
- ④ 長期化する原子力など災害の影響について、展示



物、パネルや映像、インタビューなどを用いて表現されていました。



東日本大震災・原子力災害伝承館全景



シアターで待機中の中丸地区の面々

1階に降りると施設のテラスに津波によってつぶされた消防車両が展示されていました。前方を見ると広大な芝生が広がっていました。遠くの方で小さな動くものを見つけました。近くにきたのでよく見るとなんと芝刈りロボットでした。つぶれた消防車両とロボットの対比が、技術の今昔を感じました。ロボット2台がゆったり動き回って仕事をしていました。



津波によりつぶされた消防車両



芝刈りをするロボット

Ⅲ フィールドワーク(60分)

当バスに同乗するフィールドパートナーの説明や解説を聞きながら、双葉町と浪江町の被災地の現状を見学しました。海岸から約400mに位置する東日本大震災・原子力災害伝承館を出発して浪江町の請戸(うけど)小学校(海岸からの距離約300m)を車窓に見て大平山(標高6m)に降車し、フィールドパートナーの説明を聞き感動しました。

それは、先ほど見た請戸小学校の先生や校内にいた生徒全員が避難できたことです。決められた避難ルートは約1.5Kmで低学年の生徒や車いすを利用した生徒には大変な道のりであったとのこと。先生が背負って、他の先生が車いすをたたんで持って、高学年性が低学年生をかばいながら避難を進めた。しかし避難道路は殺到する自動車による大渋滞が発生し、遅々として進めなかったとのこと。そのため先生たちは機転を聞かせ、あぜ道を通り大平山に到着したが登り口が分からず混乱した、その時、以前来たことがあるという野球部の生徒の誘導で無事避難できました。そして生徒たちには後ろを振り向かないよう歩くことを指示していました。当時の大平山は木々が鬱蒼とした森であったため、避難しても小学校や周辺の悲惨な状況を見なくて済んだ。生徒たちの心の傷を心配してのことでした。これら一連の行動に感動しました。



大平山(霊園)での説明・解説様子

その後、JR 双葉駅前に移動しました。ちなみに双葉駅周辺の約 555 ヘクタール(町面積の約1割)が 2022年8月に避難指示解除されました。新しい駅舎の脇に旧駅舎が残っていました。旧駅舎の時計が東日本大震災の発生時刻を示していたのが印象的でした。

この時計も事故を忘れないとの思いで残した方がよいとの意見、これを見るたび震災を思い出すので撤去した方がよいとの意見があり、役場も検討中とのこと。



左が旧駅舎（黄色） 右が新駅舎

この後、双葉駅から東日本大震災・原子力災害伝承館に戻り、隣接する双葉町産業交流センター2階レストランエフで昼食をいただきました。美味しかったです。ごちそうさまです。

見学も終了し、小名浜のいわき・ら・ら・ミュウでお土産タイムです。私は、福島柏屋の「薄皮まんじゅ」・いわきのお菓子のみよし「じゃんがら」を購入しました。

IV 見学会の感想

東日本大震災・原子力災害伝承館の映像、展示や解説などで複合災害が発生すれば猛烈に厳しい状況に陥ること。それらの対応は（防災・減災）を常に意識として持ち続けること、そしてできる限りの安全文化の醸成や常日頃の訓練が極めて重要と思いました。これは、常に住民、自治体と事業者が一体となって命を守る（事故を起こさない）活動を進めることが必要です。どれか一つ欠けても命を守ることは叶いません。

特に今回の見学で印象が強かったのは、双葉町、浪江長をバスの車内からみて、この地方は避難指示解除が遅かったが、大震災から13年を経過した現状、周辺のほとんどの田んぼが雑草放題であり、役場周辺の個人住宅なども戻って生活している住宅と生活感がない住宅がかなりの数あったように思います。車両は動いているが、人の気配がないような状況でした。

住宅街から少し離れると白い壁の囲いがあり、覗くと黒フレコンバッグが保管されていた。このような場所が至る所にある。これは、除染土壌の一時保管場所です。これを見て復興はまだまだ先が長いなと感じました。アルプス処理水は一步動き出していますが、廃炉作業はまだまだ見通しが立っていない状況です。また、廃炉関係の廃棄物の処理・管理も進められていますので注視していきましょう。

最後になりましたが、解説者が安全情報（例えばハザードマップ）を鵜呑みしないで自分の目で確認し、より安全な対応がとれるよう自分のものにすることが大事ですいわれたことが耳に残りました。

以上

参考資料

東日本大震災の概要

① マグニチュード 9.0

東日本大震災は、2011年3月11日14時46分頃に発生。三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近で、深さ約24kmを震源とする地震でした。1900年以降、世界でも4番目の規模の地震でした。

② 被害概要

被害状況等については、まだ行方不明者も多く、全容は把握されていません。緊急災害対策本部資料によると、震災から3ヶ月を超えた6月20日時点で、死者約1万5千人、行方不明者約7千5百人、負傷者約5千4百人。また、12万5千人近くの方々が避難生活を送っています。

③ 震度

本震による震度は、宮城県北部の栗原市で最大震度7が観測された他、宮城県、福島県、茨城県、栃木県などでは震度6強を観測。北海道から九州地方にかけて、震度6弱から震度1の揺れが観測されました。

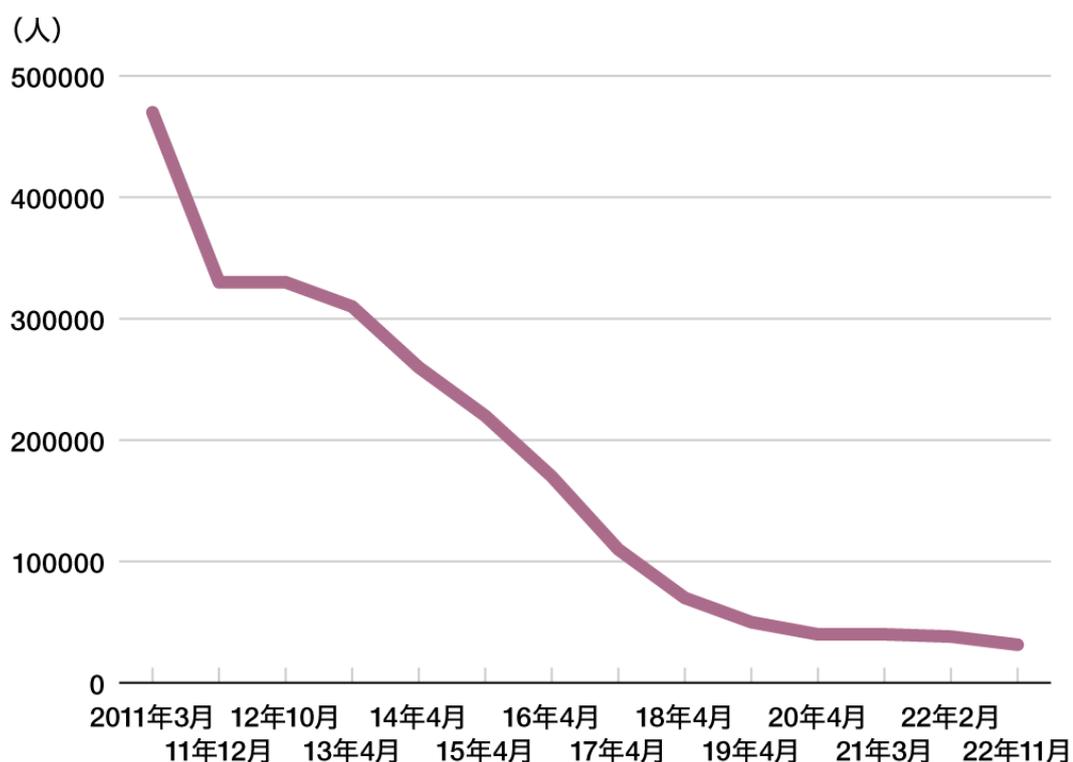
その後も強い揺れを伴う余震が多数観測されています。気象庁によると、4月7日に宮城県沖を震源として発生した震度6強の余震をはじめ、5月31日までに発生した余震は、最大震度6強が2回、最大震度6弱が2回、最大震度5強が6回、最大震度5弱が23回、最大震度4が135回観測されました。

東日本大震災の概要

発生日時	2011年3月11日14時46分頃
震源	三陸沖（北緯38.1度、東経142.9度、牡鹿半島の東南東130km付近） 深さ約24km
震度	震度7 宮城県北部 震度6強 宮城県南部・中部、福島県中通り・浜通り、茨城県北部・南部、栃木県北部・南部 震度6弱 岩手県沿岸南部・内陸北部・内陸南部、福島県会津、群馬県南部、埼玉県南部、千葉県北西部
死者	15,467名
行方不明者	7,482名
負傷者	5,388名
避難者数	124,594名
建物倒壊	全壊103,981戸、半壊96,621戸、一部損壊371,258戸
被災者の救助活動状況	救出等総数26,707名
部隊派遣等の状況 (これまでに派遣された人員、対応勢力総数)	警察庁 広域緊急援助隊等 約51,600名 消防庁 緊急消防援助隊 約28,620名 海上保安庁 特殊救難隊等1,792名、巡視船艇等5,284隻、航空機1,869機、 防衛省 自衛隊等の最大派遣規模 約107,000名 厚生労働省 6月20日現在の活動チーム数：医師等の派遣38チーム、保健師派遣101チーム

- ④ 復興庁によると、災害関連死を含めてこれまでの死者は1万9759人、行方不明者は2553人、全壊した住家被害は12万2006棟。22年11月現在、今も**3万1438人**が避難生活をしている。避難生活の場は全国に及ぶが、うち関東に約1万3800人、東北各県に1万1000人が住んでいる。県外への避難者数は、福島県からが2万1000人、宮城県からが1300人、岩手県からが590人。

避難者数の推移



(出典 6 出所:復興庁の公表資料を基に編集部作成

nippon.com

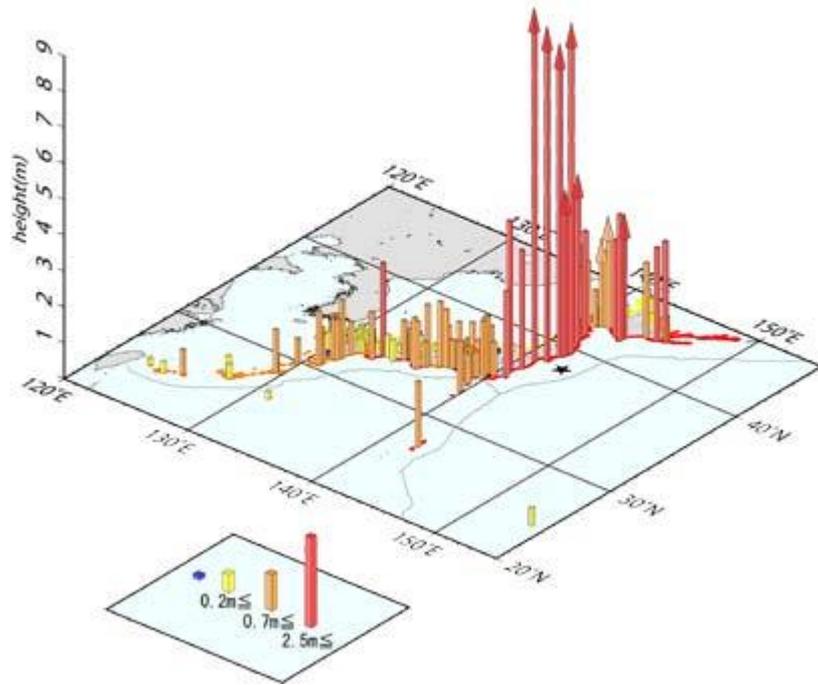
③ 未曾有の大津波

今回の大震災では、岩手、宮城、福島県を中心とした太平洋沿岸部を巨大な津波が襲いました。

各地を襲った津波の高さは、福島県相馬では9.3m以上、岩手県宮古で8.5m以上、大船渡で8.0m以上、宮城県石巻市鮎川で7.6m以上などが観測(気象庁検潮所)されたほか、宮城県女川漁港で14.8mの津波痕跡も確認(港湾空港技術研究所)されています。また、遡上高(陸地の斜面を駆け上がった津波の高さ)では、全国津波合同調査グループによると、国内観測史上最大となる40.5mが観測されました。

国土地理院によると、青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の6県62市町村における浸水範囲面積の合計は561km²。これは、山手線の内側の面積の約9倍にあたります。また、同院が公開した浸水範囲概況図から、今回の津波が、仙台平野等では海岸線から約5km内陸まで浸水していることが確認できます。

津波観測状況



福島県の避難指示区域(2023年2月末時点)

